

寄稿

稿

経済学部教授 飯田 義明



▲ テーブルマウンテンの山頂から望むスタジアム



そこに足を踏み入ると「フォーフォーと凄まじいブブゼラの音と人々の明るい声が鳴り響いていた。今回、6月7日から9日の3日間、ポートエリザベスで学会発表があり、初めて南アフリカの地を踏むこととなった。ちょうどこの時期、南アフリカ大会が6月11日から7月11日までの約1カ月間開催されていた。学会発表の後、南アフリカの街々を巡り、熱気あふれるアフリカ大陸初のワールドカップ試合観戦の機会を得ることができたので、その様子を南アフリカの歴史的背景を含め報告をさせていただきます。



▲ ヨハネスブルクの中心地

熱気あふれる南アフリカ実感 ワールドカップサッカー

「虹の国」の光と影

皆さんは世界地図からパッと南アフリカの位置を指し示すことができるだろうか。ここは16世紀以後、インド洋と大西洋をつなぐ(すなわちヨーロッパとアジアをつなぐ)通商航路の重要な地点とされた喜望峯(西ケープ州)を有するアフリカ最大の経済大国なのである。

1652年にオランダ人が入植し、1806年にイギリス人がケープタウンを占領することになり、以後イギリス人の街が形成されていく。オランダ人は内陸部に移動し、アフリカーナーと呼ばれる、現地語と融合した

アフリカーンス語という独自の言葉を作り上げていく。原住民は奴隷とされ、その後アジア(特にインド)などからも奴隷として入植させられ、白人との混血はカレードと呼ばれる。このようにさまざまな人種によって構成されてきたことから「虹の国」と呼ばれるようになったのだ。

もう一つ、南アフリカで忘れてはいけないことは、21世紀の直前までアパルトヘイト政策と呼ばれた人種差別が国によって徹底されていた

というのである。この政策から有色人種が解放されたのは、1990年に黒人指導者であるネルソン・マンデラ氏が釈放された影響による。それを受けてこの体制が撤廃させられることになるのだが、この人種政策による影はいまだにさまざま

南アフリカのスポーツとサッカー

この国はイギリスの影響を色濃く反映しており、ラグビー、クリケット、テニス、ゴルフなど、世界的な活躍がみられるスポーツであるが、基本的には白人社会中心で行われている。サッカー、ラグビーボールが立

てられている。地域的に旧白人地区であれば大学ラグビースタジアムを有しているほどだ。一方、サッカーはほとんどが貧しい地区の土グランド(どちからかという空き地?)で行われているのが現状だ。すべ

に渡している。それは、反目していた白人と黒人の国民統合した瞬間と今でも讃えられている。そのような背景のなか、今回の南アフリカでの大会開催に国は、そして国民は何を求めたのか、と考えを及ぼすと興味深い。最後に、今回は日本代表の活躍により、日本中に活力を与える「記憶に残る大会」になったのではないだろうか。その一方、「日本サッカー界には何が残ったのだろうか?」このテーマに関して



▲ スラム街と空き地



▲ 各国ファンの熱気が入り交じったスタジアム



▲ デンマークのファン

「虹の国」と呼ばれるようになったのだ。もう一つ、南アフリカで忘れてはいけないことは、21世紀の直前までアパルトヘイト政策と呼ばれた人種差別が国によって徹底されていた

最後に、今回は日本代表の活躍により、日本中に活力を与える「記憶に残る大会」になったのではないだろうか。その一方、「日本サッカー界には何が残ったのだろうか?」このテーマに関して

ワールドカップを観戦して

ナショナル・イベントからビジネス・イベントへ

6月7日、日本から約20時間かけて南アフリカ国際空港のヨハネスブルクに入った。学会会場はポートエリザベスというインド洋側の都市であり、トランジットのため

空港で6時間過ごさなければならなかった。南ア旅行経験者から、空港自体が危険だと言われ、緊張していたのだが非常に多くの警官が配備されており、トランジットのため

守られているということであって、そこ以外へ出るということは何が待ち受けているか判らないというところもある(犯罪率は世界トップクラス)。試合は、ケープタウンで開幕戦の「フランスvsウルグアイ」、ヨハネスブルクから100キロ程内陸部に入ったルステンブルグでの「アメリカvsイ



▲ オランダのファン

ただ観戦者は、この20年で変わってきているように感じる。1990

いいだ・よしあき 経済学部教授、筑波大学大学院修了。日本フットボール学会(理事)、スポーツ社会学会などに所属。ユニバーシアードサッカー日本代表チームのコーチなどを歴任。主な担当科目はスポーツ社会学論、スポーツ文化論ほか。